



淡江 ニュース

発行者：張家宜

第1巻 第2号

台湾 新北市淡水区

淡江大学

平成26年4月28日 発行

世界の大学インターネット ランキング 本校アジア90位 全国10位にランクイン 『遠見』企業が最も愛する大学 評価でも5指標私立校1位に

世界の大学インターネットランキング (Webometrics Rankings of World Universities; WRWU) が2014年2月に最新ランキングを発表し、本校は世界ランキングで第513位、アジア第90位、全国第10位となり、アジア100大学の中の「Openness」指標で34位に上昇した。

情報部黄明達部長は2013年7月の世界大学インターネットランキングを例にあげて、本校のインターネットドメインの中で閲覧が多かったのは、本校のトップページの他、閲覧率第2位の物理学科ホームページ、第3位電機学科ホームページであった。黄部長は、全校が共同して情報化の重要性と必要性を理解し、キャンパスの情報化のレベルを上げていく必要があると強調した。この他、黄部長は、教師が教育記録ページで個人情報を更新するのが大切で、この機能を借りて情報量を増やし、情報の流通量を加速させ、教師と学生のインターアクションを活性化させたいと述べた。

本校は「Openness」指標で近年、学術研究ファイルの掲載量をあげており、去年の41位から34位に上昇した。これは本校が学術出版のデジタル化に努めた成果である。しかし、「Presence」指標はランキング94位、「Impact」指標ランキング1194位、「Excellence」指標ランキング993位となり、これら3項の評価は後退している。

WRWU サイト (<http://www.webometrics.info/>) の資料によれば、世界大学インターネットランキングのポイントは世界の大学のデータベースと Google、Google scholar、Yahoo、Live Search、Alexa 等の重要インターネット検索エンジン、さらに学術資料デジタル化以後の引用回数を、評価項目に入れて、ランキングは毎年1月と7月に更新されている。

この他、『遠見』雑誌と1111人材バンクが協力して実施した、2014年「企業が最も愛する大学評価調査」

2014年2月世界大学ネットワーク排名 臺灣前十名大學					
大學	世界排名	Presence	Impact	Openness	Excellence
臺灣大學	40	2	114	22	104
交通大學	175	159	162	310	303
清華大學	236	84	440	155	316
中央大學	252	152	255	400	436
師範大學	347	164	371	115	934
成功大學	374	5596	356	78	208
政治大學	411	997	226	122	1323
中山大學	422	112	803	357	515
中正大學	502	716	464	598	806
淡江大學	513	94	1194	34	993

資料來源 / Webometrics Rankings of World Universities; WRWU 製表 / 淡江時報

2014年2月に発表された「世界の大学インターネットランキング」で淡江大学は台湾の各国立大学と並んで第10位にランキングされた(写真提供:淡江時報)。

の結果が発表され、本校は総合で私立大学ランキング2位となったが、本校の卒業生は6項目の指標中、「業務成果」、「国際視野」、「独立作業」、「団体能力」、「危機処理」の5項目で私立大学第1位となり、「創造力」で私立第3位になった。

『遠見』は、企業は新入社員の「若さがパワーになる」点を最も評価しており、また「学習力と適応力」を重視している。この外、企業は実務経験を在学中の成績よりも重視し、アルバイト経験や専門資格、実習経験、外国語能力の4項目は加点して評価している。

淡江統計学科 QS 世界学科評価 のトップ200位にランクイン

イギリス高等教育調査機構 Quacquarelli Symonds (略称 QS) 社は3月に「世界大学学科トップ200ランキング」を発表した。QSは世界で最も影響力のあるグローバル大学ランキングのひとつで、総合ランキングのほか、5大学術領域のトップ200校の学科ランキングを提供している。本校は今年「社会科学と経営」領域で世界151位から200位の間に入り、今回初めて世界ランキングの仲間に入った。

QSの5大学術領域は芸術と人文、工学とハイテク、生命科学と医学、自然科学、社会科学と経営である。統計学科吳淑妃主任は、「本学科の教師の学術研究成果は良好で、

2009学年から2011学年度に、平均して各専任教師が発表した雑誌論文は5.58本である。その中で、96篇がSCI、SSCI、EIに収録され、5冊の専門書もある。教育、研究、サービスの3方面での注意深い実績の積み重ねと弛まぬ努力があり、また卒業生の各業界での活躍もあって、これらが評価された結果だろう」と述べた。今後の持続的な改善については、吳主任は「本学科では卒業生を通じてさらに多くの資金とリソースを集め、科技部計画の補助を受け、ソフト面ハード面の設備を改良し、教師の研究能力を向上させ、今後も努力を継続し、ランキングアップをはかりたい」と抱負を語った。

本校はQSの去年の評価結果では、251位から300位の間で、東呉、大同、暨大などと並んでいる。品質保証認定部の張倍禎専任研究助理は、現在、本校は積極的に世界大学ランキングのランクアップを目指しており、本学年度の教育校務革新研討会でも研討がおこなわれたと述べた。張助理は、今後は姉妹校とも協力して、国際学術共同研究でもQS組織に参加し、本校の評価を上げ、調査の機会を増やし、学術的声望を高めて、評価項目指数アップを目指したいと説明している。

台湾永光化学工業・陳定川氏 移動化学車を化学科に寄贈

台湾永光化学工業株式会社が移

動化学館として140万元の化学車を寄贈した。3月12日、化学館で「移動化学館寄贈式典」がおこなわれ、永光化工名誉会長陳定川氏、張家宜学長、戴万欽国際事務副学長および各学部学部長が出席してテーブルカットがおこなわれた。

張学長は挨拶の中で、陳会長の理解で、化学車が継続して台湾全土を回れるようになったことに感謝し、また、計画に参加しているメンバー、学生や、消費物資を提供しているメーカーに謝意を述べ、「より整った設備とリソースがあれば、私たちはさらに次の行動をとることができる」と決意を述べた。陳会長は自身の化学研究40年の経験を語り、化学材料、原理と経済全体の発展はみな相互作用があり、たとえば台湾の世界全体での工業生産ランキングは第9位にあがっている。この事業で若い世代を激励し、基礎を固めてさらに次世代の育成に努めたいと期待を述べた。



今学期、移動化学車は1月24日から巡回を開始し、高憲章事務長が移動化学車チームを引率して、60ヶ所の学校でボランティアをおこなう。3月10日には、第8校目の正徳中学校賢孝キャンパスで、「濃硫酸をカルシウム粉に加えた脱水の原理」による花火マジックが披露され、学生の関心を集めた。この他、チームでは「ハンドソープによるスライム製作の海底公園」のテーマを実施し、参加者に製作過程で化学の原理を理解してもらった。

ハンドソープ製作過程で、参加者は甘油、食塩、香料などに界面活性剤を加え、クリーナーの主要成分と効果を学んだ。正徳中学7年19班の蕭永承さんは、「どのテーマともおもしろく、教科書の知識と違って、生活の中で応用できる」と興味を語った。

1000人の紫ユニフォームで 7校がロードランニング

本校では3月9日に「北台湾七大学連合ロードランニング競技会」活動をし、本校の教師、学生、クラブからのチームが参加した。張学長が校内部門の管理職を引率し、1000人の「紫の淡江」ユニホームが新北市三重区の幸福水際公園を走った。

マレーシア同窓会、華僑同窓連合会等、国外学生組織も参加し共に走った。マレーシア出身の国際企業学科3年生彭偉祥さんは「今までロードランニングはしたことがなかったが、今回は7校の連合開催でとてもおもしろい。華僑同窓会のメンバーも参加して、事前に運動場でランニングをして、自分の体力をあげるようにしておいた」と感動を語った。



好成績をあげるために、各部門の管理職は競技前に運動場で試走し、競技中は全力を尽くした。記録では、本校の参加者の成績は、3名の教職員男子組の体育教師陳瑞辰先生が10分7秒で第1位、女子組魏瑞好先生が14分59秒でトップになった。5名の学生組では、男子組の王俊智さんが21分18秒で第1位に、女子組の溫程茜さんが27分38秒でチャンピオンになった。体育事務処蕭淑芬体育長は喜んで、今回の活動は大きな反響があり、多くの教職員や同窓生、学生が運動の楽しさを知ることができた。さらに、スポーツが盛んになるように願っていると希望を述べた。

図書館でタブレットPCを推薦

タブレットPCは最近の流行だが、今学期、覚生記念図書館にもお目見えした。3月に図書館では「トップを目指す図書館」活動を開催し、また4月7日からは、同時に「読書自由自在、タブレットをあなたに」活動を平日午前8時20分から午後6時まで、5階の非図書資料室で受け、タブレットPCを貸し出ししている。読者は家の中でもデジタル読書を楽しめる。

活動はまず「流行の情報化を楽しむ」が2階ロビーに登場し、展示のほかタブレットPCを教職員に体験してもらい、また華芸中国語電子図書、HyRead ebook、拿索斯オンライン音楽図書館や金庸作品等の電子図書プラットフォームを紹介した。収蔵閲覧課の石秋霞課長は、「校内電子図書典の収蔵は197万種あり、閲覧を勧めている。今月から次々にデジ

タル読書シリーズ活動を実施して、来月にはタブレットPCの貸し出しも始める」と述べた。

ラテンアメリカ外交官 淡江の新生に

本校では「アジア研究科デジタル学習修士社会人クラス」の3期生として20名の新生と第2期7名の在籍生が、3月9日から15日まで来台しクラスでの授業に参加し、台湾事情と文化を体験した。

外国籍クラスの学生にはラテンアメリカの外交関係のある諸国から多くの政界学界の重要メンバーが入っている。第3期新生にはグアテマラ外交部次長、ドミニカ駐在オランダ、ポルトガル公使、以及エクアドル労働工業省次長などがいる。

この修士社会人クラスは2012年に成立し、全国初の国際遠距離修士専門クラスである。アメリカ研究科陳小雀主任は「専門クラスが開設されてから今に到るまで、問い合わせや申請が絶えない。更に要望に応えられるように、改善を目指していきたい」と抱負を述べた。

今回の訪問学生は3月10日から日程で、まず驚声国際会議場で開催された歓迎セレモニーに参加し、張学長、戴国際事務副学長、虞国興學術副学長、高柏園校務副学長、李佩華國際長等が出席した。12日には、文錙芸術センター張炳煌主任が書道講習をおこない、中国語の学習があった。

13日は、第3期新生が外交部のランチパーティーに参加し、中正記念堂と李天祿布袋戲文物館、朱銘美術館等を見学した。14日は紅毛城、漁人碼頭、淡水旧市街を訪れ、福格ホテルで歓迎パーティーが開かれた。陳研究科長は「今回の行程は内容豊富で、学科のほか台湾の名勝巡りやグルメを取り入れ、学生達に台湾をよく認識してもらい、外交の発展に努めたい」と述べた。

卒業生李麗秋氏 Forbes の アジアトップ女性 50 人に

アメリカ『Forbes(フォーブス)』誌アジア版は、今年50名のアジアで最もパワーのあるビジネス界の女性を選出し、台湾からは3人がランクインした。その中の1人である特力貿易CEO李麗秋氏は、本校の銀行保険学科(現在の保険学科)の卒業生で、ビジネス界での活躍で第20位に入る栄誉を受けた。

今回は、『フォーブス』がアジア、ニュージーランド、オーストラリア地域のビジネス界で活躍する女性を選ぶ3回目、周囲の評価、所属会社の営業収益および会社経営への参加が評価のポイントである。雑誌サイト(<http://www.forbes.com/>)では、李氏は「雑貨女王」とされ、1978

年に輸出会社を設立した時は、規模わずかに社員5名で出発し、主に海外に事業用工具を提供していた。1996年にはイギリスメーカーと資本提携してB&Q特力屋を設立した。

現在、特力集団は台湾最大の内装インテリア販売業で、その製品は全世界の約1000軒の小売業に販売され、ウォルマート、ホーム・デポ等のスーパーマーケットチェーンで販売されている。

保険学科高棟梁主任は「先輩にはとても敬服している。将来はぜひ一度、大学に招待して交流の機会を持ち、成功の道について後輩達に伝える機会をつくりたい」と賞讃した。

第136回校務会議 インターネットリソースの 活用発展を推進



本校は4月18日に驚声国際会議場で第136回校務会議を開催し、張学長、3名の副学長および各組織管理職83名が参加した。張学長は「校務の発展中、三化教育で結果を示す必要がある。今後は「未来化」を重点事業とし、2014(103)学年度から2016(105)年の校務発展計画の中で積極的に推進したい。また、守謙国際会議センターの募金方法はまだ具体的でないので、改善を希望する。募金計画をなるべく早く完了するように」と強調した。徐秘書長は「淡江大学」、校章、ランタンデザイン、「TKU」の4項目の商標登録が通過し、法律的保証と使用権の確保ができたことを報告した。

テーマ報告の中で、李國際長は「淡江世界村建設」を主題に、国際化の現況を紹介し、英語能力課カリキュラムの強化、学術交流と活動の多様化により、淡江を世界村化する方針を述べた。

黄情報長は「キャンパスのインターネットリソース共有」をテーマに報告し、インターネット情報の現状について改善提案をおこなった。強化すべき内容として「教師経歴システム」での資料登録、各学科研究科サイト情報公開効率、大学ホームページの空間活用、ホ

ームページでのインターアクションリンク増設、校際および国際会議の誘致、教育の共有、姉妹校サイト連結、教員の論文アップロードの9項目を提案した。これらによってインターネットリソースを整備し、「世界大学インターネットランキング」でのランクアップを目指す。これらについて、張学長は各学科研究科に積極的執行を呼びかけ、具体的成果を求めた。

蘭陽キャンパス林志鴻主任は「未来化業務の深化と展望」で報告し、「未来化千里眼計画」の中で、基礎を固め、カリキュラムの付加価値向上、ビジョン確立、教育品質向上、評価向上の5項目を示した。その中で、2020年までに展示場の実作応用空間化、就職と学習単位を結合したカリキュラム制作、視野を深める活動の強化、教育優良教員の選抜により、未来を認識する視野を広げ、未来化教育の理念を強化したいと述べた。

春の饗宴 卒業生帰校デーで 1000名を超える同窓生が再会

今年度の「春の饗宴」が3月15日に淡水キャンパスで盛大に展開され、550名の卒業生が集り、学科研究科卒業生連合総会孫瑞隆会長、中華民國淡江大学卒業生総会陳定川理事長等も参加し、会の中で優秀卒業生と傑出同窓生表彰、募金等への賞状授与がおこなわれた。張学長は挨拶の中で、本校が連続17年天下社『Cheers』雑誌の企業が最も愛する私立大学第1位に選ばれ、卒業生の企業界での優れた活躍に謝意を表した。また、卒業生の支持で守謙国際会議センターの募金計画が進んでおり、66周年の創立記念に落成予定で、各地の卒業生のパワーを結集して、母校の発展に寄与して欲しいと期待を述べた。

午前には、紹謨記念体育館で趣味競技会がおこなわれ、張学長と孫会長が始球式をし、全会場には約100名の卒業生が集まって身体を動かした。孫会長は「今年は第2回の趣味競技会で、各世代の卒業生の交流が深まるように希望する。卒業生のパワーを集めてがんばろう」と挨拶した。その後、卒業生は学生生活動センターで軽食を摂り、国標クラブとダンス研究部などの演技がおこなわれ、会場は熱気にあふれた。

続いて張学長は21名の優秀卒業生賞と、30~50万元寄付者への特別賞を手渡し、この他各学部学部長が同窓会推薦の46位名の優秀同窓生を表彰した。今回、栄誉を受けた優秀卒業生賞は卒業生サービス・リソース発展部サイト(<http://www.fl.tku.edu.tw/>)に掲載されている。

蘭陽キャンパスでも3月15日に

「春の饗宴」卒業生帰校活動が実施され、100名を超える卒業生が参加した。第1期蘭陽キャンパス卒業生会呉知諭会長を招いて卒業生会の現状を報告してもらい、Tempoゲームと抽選活動、雪山トンネル彫塑での記念撮影などをおこなった。

「英語特区」、「英作文相談室」で英語4技能を強化

一対一指導を採用した英語文学科「英語特区」の受付が始まった。「英語特区」は3月10日から学期末まで開放され、時間は平日午前10時から午後4時までで、指導員は英語文学科の大学院生が担当する。英語文学科は約15名の定員を提供し、希望者は英語文学科事務室(外国語棟 FL207)に申し込む。英語文学科修士3年生王俊璋さんは「すでに何度も一対一の指導経験がある。これは英語会話のとてもよい機会だ」と述べた。英語文学科林倖仔助手は、「『英語特区』に積極的に登録して欲しい。希望者はなるべく早く」と勧め、「英語特区」は公告した時間以外でも、もし英語に関する質問や英語関係の問題あるいは英会話を練習したい場合は、開放期間に行けば、予約なしでもチャンスがある。

この外、先学期に成立した「英作文相談室」(外国語棟 FL506)も、5月30日まで開放されている。これは英語文学科特色計画のひとつで、相談室の教師は英語文学科の外国籍教員と博士、修士でチームを作っている。相談室の企画者である英語文学科黄月貴副教授は「去年の10月に開始して学期末まで実施し、50名の教師学生の協力で、今後はさらに多くのサービスを校内の在校生や教職員に提供したい」と述べた。

対象は雑誌出版の論文等、学位論文、テーマ報告、学習計画および留学申請文書が必要に応じて相談を受ける。希望者は <http://www.ewc.english.tku.edu.tw> で登録予約できる。

外国語文学部六語紹介淡水景点

外国語文学部呉錫徳学部長は学部の翻訳センターで2月23日に中国語版『淡水スポット通訳教材』が完成し、5月に外国語文学部各学科の教師が英、仏、独、スペイン、日、ロシアの6ヶ国語に翻訳した各版を制作する。呉学部長は「通訳は本学部学生について見れば、職場に直結する重要な一部分である。この教材によって、学生が実際に淡水で実務経験を積めるようになる。各学科言語で淡水の文化を紹介できるようにすることで、実践的な練習ができ、学習と実用が一体になって、学習内容を実生活に活かせるように



今年2月に日本の同志社大学剣道部と本校剣道部との間で初めておこなわれた友好交流剣道競技会での全体記念撮影。(写真提供:淡江時報)

なる」と期待を述べた。

呉学部長は、この教材は8月に本校出版センターが出版し、朗読CD付きで、2014(103)学年度の第1学期から教師に提供され、今後、さらにその他の観光スポットの通訳教材を制作する予定である。

外国語文学部で学生支援募金

外国語文学部では昨年12月に「倍返し就学扶助募金計画」を実施し、1月3日で締め切った。合計で40万元が集り、外国語文学部呉学部長は「外国語文学部各学科と卒業生に感謝する。今学期には計15名の学生に支給され、日本語文学科とフランス語文学科が最多で、各5名、次がスペイン語文学科3名となる。募金は続けて受け付けるので、卒業生の募金を歓迎する」と述べた。この援助計画は家計困難や緊急援助を目的とし、学生の苦境を救うことを目指している。補助は毎月2千元とし、毎回の補助は学期ごとにおこない、各人2学期まで申請できる。申請条件は、申請事由に担任の推薦状を付け、学科科目が全部合格していることである。審査会でチェックし通過後、補助を実施する。審査会は各学科主任と1~2名の専任教員が構成し、次の学期の開始前2週間に申請を受け、申請したい学生は各学科に届け出る。

外国語文学部で通訳設備増設

通訳訓練が外国語文学部の今後の発展特色になる。102学年度の重点研究計画設備費の中に、200万元の補助が認められ、会話専用教室に通訳設備を増設し、学生の外国語応用能力と就職力を高めることになった。

外国語文学部呉学部長は「現在、本学部にはただ一つしか通訳専用教室がないため、授業時間にも制限が大きい。そこで今学期が終わる前に、英語文学科と日本語文学科の会話教室に通訳設備を増設し、会話、通訳の二つの機能を教室に

持たせる。席は24個から60個に増やし、同時に会話教師が通訳実務を授業に取り入れられるようにする」呉学部長は、将来、学部内の各学科にもこの設備を増設し、学生がより整った通訳訓練を受けられるようにして、専門能力を高めたいと抱負を述べた。

外国語文学部と日本国立熊本大学交流協定調印

2013(102)学年度1学期末に、日本の国立熊本大学社会文化科学研究科渡辺功科長、文学部水元豊文副部長、社会文化科学研究科森正人教授の一行3人が来校し、外国語文学部との学術交流協定に調印し、学生交流の契約を結んだ。外国語文学部呉学部長、日本語文学科馬耀輝主任および李国際長が出席して調印し、日本語文学科廖育卿助理教授が通訳を担当した。調印式のほか、双方で記念品を交換し、集合写真を撮って協力の里程とした。

呉学部長は両校の繋がりや深さを強調し、頻繁な学術交流が最も好い証拠になると語った。渡辺功科長は、本校の全力での交流への支援に感謝し、今回の協定を出発点にして、他の学部との交流にも広がっていきたくて期待を述べた。李国際長は、熊本大学は優秀な協力相手で、契約の時、ペンを共有したことを例にあげて、協力の合意と誠意を説明した。

日本語文学科退職教員送別会

人材リソース部は2014年1月7日午後1時30分から、覚生国際会議場で「102学年度第1学期退職教職員送別パーティー」を開催し、本学期は計14名の退職者を送り出した。その中には、中国語文学科呂正惠教授、化学科簡素芳教授、航空宇宙学科馮朝剛教授、日本語文学科高津正照助理教授、日本語文学科黒島千代講師、および職業指導課張興星職員等5人が出席して名残を惜しんだ。

パーティーの当日は、張学長が挨拶し、記念品を贈り、教職員福利委員会宛同主任委員が送別の言葉を述べて記念品を贈呈した。一同で退職する教職人を祝福し、退職教職員が謝辞、在校生活での思い出を語り、全員でよい記憶を回想して、記念撮影をおこなった。

日本同志社大学 剣道部来校

2月26日午後3時、日本の同志社大学剣道部57人が見学のために来校し、本校の剣道部と学生生活活動センターで剣道交流友好競技会を開いて、両隊のメンバーが剣道を競い、現場は活発な交流がおこなわれた。国際事務戴副学長、柯志恩学務長、卒業生サービス・リソース発展部彭春陽事務局長、李国際長、日本語文学科馬主任、課外活動課江夙冠課長および淡江剣道部卒業生などが参加した。戴副学長は挨拶で「本校と同志社大学の交流は密切で、次の機会があれば、日本でメンバーと交流できると好い」と述べた。

今回の友好競技会は男子組と女子組に分かれておこなわれ、日本同志社大学剣道部卒業生会目良紀夫会長が挨拶して「淡江大学が開いた今回の活動では、両校が協力して努力し、今回の活動にも繋がりたい」と期待を現した。活動では教師、先輩が指導をおこない、学生と卒業生が交流し、対戦式で練習を進めた。活動実行委員長で剣道部卒業生の侯玉娟さんは「このような機会を利用して、淡江の学生の国際観と剣道の向上を目指したい」と述べ、剣道部日本語文学科3年生劉鈺婷部長は「関西の強豪である同志社大学と交流の機会ができて、非常に得がたい経験だった」と喜びを語った。

日本文化研究クラブ成果展



日本文化研究クラブは3月24日にブラックスワン展覽場で「第6回日本文化研究クラブ成果展及び開幕茶会-合縁・祈縁」を開催し、高校務副学長、戴国際事務副学長、柯学務長、日本語文学科馬主任、日本文化研究クラブ指導教師・日本語文学科廖育卿助理教授等が参加した。廖助理教授が全員を案内し展示場を見学したほか、茶道の点前を披露して参加者をもてなした。高副学長は引『莊子』「庖丁解牛」を引用して「庖丁は牛の解体を通じて生命を分析している。

同じく茶道精神も、飲茶の過程では生命の意義と価値を体得でき、同工異曲のよさがある。この展覧会を機会にして日本への認識を深めて欲しい」と祝辞を述べた。

今回は東京八坂神社をモデルにして、展示エリアでは立体大型神社を設置し、参観者が日本式神社の礼拝、神籤、絵馬の祈願文化を体験できるようにした。その他、現場では浴衣、和服、茶道具が春をテーマに展示され、日本色豊かな文化の香りがあふれた。日本文化研究クラブ林佳如活動長は「初めてこんなに大きなスケールの神社を作ったが、私たちは衛生紙ロールなどの廃品を集めて制作した。環境保護の思想を伝え、参加者に恩に報いる感謝の心を伝えるようにしている」と今回の構想を述べた。

日本和洋女子大学 国際遠距離課程を見学

日本和洋女子大学門脇由紀子教務部長と高久田佳津子英語学類長の2名の教授が、2月26日来訪し、日本語文学科彭春陽副教授、日本語文学科施信余副教授が案内して、遠距離教育教室を参観し、実地に遠距離教育の授業を見学して、本校日本語文学科、英語文学科の教員と懇談した。

彭副教授は、今回の両校の協力では本校の国際遠距離教育課程を実例として、日本の和洋女子大学との将来の提携の可能性を探るものだ」と述べた。

遠距離教育発展課王英宏課長は「本校の遠距離教育は関係者の長年にわたる努力でよい成果をあげており、今後も持続的発展に努力し、国際大学間協力のモデルを作っていきたい」と期待を述べた。今回の活動では日本語文学科馬主任が日本語文学科の教員と「東京外国語大学」、「日本早稲田大学」との国際遠距離教育の経験を述べ、英語文学科蔡振興主任は英語文学科の教員と「日本早稲田大学」との国際遠距離課程の経験を語った。

淡江カップ日本語ディベート コンテストで本校が優勝

本校日本語文学科が開催している「第4回淡江カップ全国日本語ディベートコンテスト」が4月12日に驚声国際会議場でおこなわれ、今回の競技討論テーマは「大学日本語文学科の卒業条件として日本語能力試験を課すことの是非」で全部の競技は日本語で実施された。競技参加チームは7隊で、本校日本語文学科の他、東海大学、文藻外国語大学、屏東商業技術学院、景文科技大学の各大学専門学校か



4月12日に開催された日本語文学科主催「第4回淡江カップ全国日本語ディベートコンテスト」の様子。(上)決勝戦：淡江-屏東戦(左下)閉会式授与式での3位淡江大学(右下)1位淡江大学(写真:日本語文学科)

らチームが参加し、50名を超えるメンバーがディベートを競った。最終戦まで、本校日本語文学科学生で組織している2チームが残り、それぞれ第1位と第3位に入賞した。その外、日本語文学科4年生林筠榕さんが最優秀立論賞、日本語文学科4年生沈昀萱さんが最優秀反駁賞を獲得し、また日本語文学科4年生鄭彤安さんが「最優秀ディベーター賞」の荣誉に輝いた。

受賞者一覧

<甲組個人>		
立論	東海大学	蔡佳熹
答弁	屏東商業技術学院	陳怡君
再答弁	屏東商業技術学院	林汶儒
結弁	屏東商業技術学院	陳珮靜
<乙組個人>		
立論	淡江大学	林筠榕
答弁	景文科技大学	許碩芸
再答弁	淡江大学	沈昀萱
結弁	屏東商業技術學院	楊庭嬋
<団体賞>		
第1位	淡江大学(ディベート大作戦)	
第2位	屏東商業技術学院(最後の屏東ライダーW)	
第3位	淡江大学(大桜花林隊) 屏東商業技術学院(最後の屏東ライダーX)	

鄭さんは、チャンピオンになれたのは意外だった。淡江大学の中にカップを留めることができ非常にうれしいと感想を述べた。鄭さんは、最初の屏東技術学院との

試合では出来が良くなかった。しかし、全隊で討論して戦略を練り直し、決勝戦では効果的な攻撃ができて、ついに勝利を得たと説明している。

教育校務観察週 多くの学科 研究科が日本へ研修に

4月初めは教育校務観察週で、多くの学科研究科が日本の姉妹校を訪問し、またマレーシアとの交流を実施した。3月31日、高校務副学長が中国語文学科の9名の教員を引率して日本の姉妹校早稲田大学の「早稲田大学2014社会と文化国際学術研討会」に参加した。中国語文学科盧国屏教授は、研討会は第15回を迎えており、初めて日本に来て、早稲田大学中国語学科、中国古籍文化研究所と協力し、交流内容を整理完成した後、半年後に出版する予定であると述べた。

会議の午前、高副学長と早稲田大学中国語学科稲畑耕一郎教授が基調講演をおこない、早稲田大学岡崎由美教授、政治大文学部林啓屏学部長、北京大学中国語学科劉玉才教授、復旦大学鄭利華教授等の研究者が、「東アジア社会と文化」のテーマで論文発表をおこない、全部で25篇の論文が発表された。中国語文学科殷善培主任は、この機会を利用して厚誼を深め、専門での学術交流ができた。中国語文学科でも国際研討会を開催し

ていきたいと期待を述べた。

外国語文学部は日本の同志社大学と2013(102)年に学部間の交流協定を結び、3月29日に外国語文学部呉学部長が卒業生サービスリソース部彭事務局長、日本語文学科馬主任、フランス語文学科楊淑娟主任、およびロシア語文学科張慶国副教授の一行5人で、「同志社大学文化情報部と淡江大学外国語文学部学術交流研討会」に参加した。

呉学部長は、「同志社大学は大学3年生出国留学での人気校のひとつで、本協定によって、毎学期同志社大学の教員と学生は台湾で論文発表ができる。また学術交流によって、若者の視野を広げることができ国際化が可能になる」と述べた。研討会では双方の留学生がみな二つの学位を取得できるようにすることが提案され、今後もしうまくいけば、日本語文学科が最初の双学位が取れる日本の姉妹校を持つ学科になる。

未来研究科と国際連合教育科学文化機関(UNESCO)は3月31日から4月1日までマレーシアのクアラルンプールで共同で世界未来学連合(WFSF)学術ワークショップ・都市の未来思考を開催した。未来学研究科はSohail Inayatullah客員研究員と宋玖玖副教授が大学院生の劉薇蓮さん、張暉欣さん、楊道揆さんおよび卒業生吳姿瑩さん等とともに参加し、アジアの経済発展の中での都市の未来を考えた。未来学研究科修士1年陳維信さんは、「この機会に、学んだところを応用し、そこから学んで、その他の国家を理解し、都市の未来に対する予想を立てていきたい」と成果を語った。

24の冬季休暇ボランティア隊 各地方で奉仕活動

冬休みのボランティア隊の結団式が1月20日に学生活動センターで盛大におこなわれ、中国語歴史連合サービス隊と日本語文学科サービス隊はすでに出発していたので参加できなかったが、その他24のボランティアチームが参加して、張学長自ら各隊の隊長に校旗を手渡したほか、タイ国ボランティアサービス隊が演目を披露して、活力と熱情を満場に広げた。

張学長は挨拶で、知情体群美の五育中で群育は重要で、クラブ活動等で団体精神を養うのが効果的だが、サービス学習も大切で有意義であると述べ、参加者の健康を祈り活動中には、熱意を持って全力で取り組み、各チームの活動が円満に成功するように祈念する」と激励した。(原記事:淡江時報/編訳文責:落合由治)